

令和 7 年 2 月 21 日

教 育 長 様

研究コース	
A グループ研究A	
校園コード（代表者校園の市費コード）	
511001	
選定番号	101

代表者	校 園 名：	大阪市立堀川小学校
	校園長名：	衣笠 博政
	電 話：	6358－3336
	事務職員名：	西 麗美
申請者	校 園 名：	大阪市立堀川小学校
	職名・名前：	校長・衣笠 博政
	電 話：	6358－3336

令和6年度 「がんばる先生支援」研究支援 報告書

◇令和6年度「がんばる先生支援」研究支援について、次のとおり報告します。

1	研究コース	コース名	A	グループ研究 A	研究年数	継続研究（2年目）						
2	研究テーマ	知・徳・体のバランスのとれた児童の育成 － 問い・対話・振り返りを重視した授業改善 －										
3	研究目的	1. 単元始での問い、展開での対話、単元末の振り返りを重視することで、見通しを持ち主体的に学びに向かう児童を育成する。 2. 系統を意識することで、基礎・基本を定着し、応用的な力を育成する。 3. 本校の研究の積み重ねを活用し、「教えること」「気づかせること」に重点を置き体力の向上を図る。 4. 学習中の言葉に着目し、「学習の言葉：学習用語」「関わりの言葉：支える言葉、関わる言葉」を豊かにし協働する学びを研究する。 5. 教職員の学びの場を保障し、授業観、指導観、児童観をアップデートし、学校力を向上させる。										
4	取り組んだ研究内容	<p>いつ、何のために、どのようなことを実施したのかを具体的に記載してください。（MSコック 9.5ホイント）</p> <p>知徳体をバランスよく育成するための研究を計画的に推進してきた。行頭に主となる対象を記した。 【全】：知徳体全体に関わる内容、【知】：知に関する内容、【徳】：徳に関する内容、【体】：体に関する内容</p> <p>【全：研究全体会・全体研修会】4月22日 研究内容と年間計画の共通理解 ・知徳体それぞれの取組内容を共通理解する。児童の「問い-対話-振り返りのサイクル」に必要な手立てを探ることを次回までの課題とする。教職員の「問い-対話-振り返りのサイクル」のためにポートフォリオの記入を開始する。</p> <p>【知：全体研修会 国語】5月24日 提案授業・研究の方向性の確認 講師：大学教員（研究授業年間6回） ・児童の「問い-対話-振り返りのサイクル」を提案授業をもとに考える。問いは単元の始め・中・終わりの全てに表れること。対話はただ話すだけではないので手立てが必要なこと。振り返りに何を書いたらいいか明示するための手立てが必要なことを確認する。→低中高で同じ言葉にし、評価のみ変更する対話のルーブリックを作成し教室掲示（以降学期ごとに自己評価）。低中高で活用できる振り返りの観点を教室掲示。 ・全学年で国語科の研究に取り組み、指導案検討会では教材分析と指導方法を検討する。授業後の協議会では「問い-対話-振り返りのサイクル」について異学年で協議し、講師先生から指導いただく。毎回教員がポートフォリオを記入し、自身の学びの振り返りを蓄積する。 ・7月26日 全学年の教材で教材分析を実施する。問いをつくるためには深い教材理解が必要であるため、講師先生に指導いただきながら学年ごとに分析する。他校からも希望する教員が20名以上参加した。</p> <p>・9月13日 国語科「注文の多い料理店」の公開授業を実施する。「問い-対話-振り返り」を実現するための手立てが有効であり、真似したいと感想をいただく。参加者と共に協議し、学びの場を共につくる。</p> <p>【徳：全体研修会 集団づくり】6月14日 ピアサポート公開授業 集団づくりの学び ・ピアサポートとは何か。安心できる学級とは何か。自尊感情・自己有用感を高める取り組み例を授業後に研修する。7月23日には、講師先生のワークショップ研修から学び、全学級で学級安心ルールに取り組むことで一人ひとりが不安を取り除き、安心できる学級づくりをめざす。その後、「ひみつの友だち」「もちあじシート」など学級の実態に合わせて、どの子も安心できる学級づくりへの取り組みを重ねる。</p> <p>【体：授業研究会 体育】年間10回各学年の授業を公開し、「教えること・気づかせること」を明確にした学習について考える。気づかせたいことを整理してから授業することで、対話する内容が定まる。ここで出てきた対話の言葉を言葉集としてまとめる。7月22日には講師先生の実技研修から学び、系統を知ることや苦手な動きは前の学年の動きに戻るため、できたを実感できる学びとなることや簡単な準備で運動量を増やす方法を学ぶ。</p> <p>【全：研究推進委員会】授業前には、授業を見る視点を整理し、全職員で共通理解をする。また、取組内容の方向性を確認するために、児童アンケート・教職員アンケートは実施のたび研究通信で共有する。</p>										
5	研究発表等の日程・場所・参加者数	研究発表等を実施した日・場所・参加者数を記載してください。										
	日程	令和	6	年	9	月	18	日	参加者数	約	82	名
	場所	堀川小学校										
	備考	令和7年1月22日 研究発表会 参加者数：約328名 場所：堀川小学校										

6	成果・課題	<p>大阪府教育振興基本計画に示されている、<u>子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上</u>および<u>教員の資質や指導力の向上</u>について、申請書に記載した検証方法から得られた結果と、それらからの結果に基づいた考察を、具体的に記載してください。</p> <p>【見込まれる成果1】</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上</p> <p><input type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>問いを持ち学びを続ける授業改善により、主体的に学ぶ姿勢を育成できる。単元末の振り返りにより、他の学びにつながる気づきを促すことで、学びの質が向上する。新しい学びをする際、既習の学びを振り返り活用する姿が見られる。「次何をするの?」という児童の声から「次はこれをしたい」という児童の声へ変わっていく。学びの言葉や振り返りに授業の内容が表現されていく。</p> <p>《検証方法》</p> <p>「知識・技能」「思考・判断・表現」の伸びに加え、「主体的に学習に取り組む態度」の伸びを検証する。児童アンケートの「学習は先生が教えてくれるもの」の回答割合が減り、「学習は自分で学んでいくもの」の回答割合が増える。学びの言葉や振り返りを検証することで、授業を振り返ることができる。</p> <p>〔検証結果と考察〕</p> <p>本校国語科の経年調査の大阪市比較を昨年度と比べると「全体」+1.5(昨年+8.1→今年+9.6:以降同様)であった。詳しく分析すると「知識・技能」+1.0(+8.0→+9.0)、「思考・判断・表現」+1.6(+9.0→+10.6)であった。特に「主体的に学習に取り組む態度」+3.4(+7.9→+11.3)と大幅に昨年を上回り、大阪市平均を超えた。同様に、児童アンケートで主体的な学びに関わる「学習は自分で学んでいくもの」の肯定割合が84.3%→88.9%と高い割合で保たれ、受動的な学びに関わる「学習は先生が教えてくれるまで待つ」の肯定割合が48.2%→23.5%と大幅に減少した。児童の振り返りからは「苦手だったけど考えることが、今は楽しくなった」「前の学習とつなげて考えることができるようになった」とあった。以上のことから、主体的な学びの要因である問いの活用、既習を活用した学び、単元の流れを子どもと共有することで次の学びが見通せるなどの取り組みが、調査結果が示す学力向上やアンケートが示す主体性向上に影響したと考える。</p> <p>【見込まれる成果2】</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上</p> <p><input type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>関わりの言葉を大切にしているので、学びの中で互いに支え合い、関わり合う学級風土ができる。集団の良さを教員も児童も感じることで、豊かな学びを展開することができる。一人も残さない学びは、関わりの言葉が大きく影響する。得意なことも苦手なこともチャレンジする意欲を育成し、学びに対して前向きな児童を育成する。</p> <p>《検証方法》</p> <p>授業の満足度が学級の満足度、学校満足度につながっていると仮説を立てたため、児童アンケートの「学級の安心感」「苦手なことにもチャレンジしようと思う」「友だちが支えてくれた」の項目の肯定的割合が8割以上となる。児童の学びを近くで見ている保護者へアンケートから、児童の学びへの満足度が8割以上となる。</p> <p>〔検証結果と考察〕</p> <p>児童アンケートの肯定的割合「学級は安心できる場所である」82.7%、「苦手なことにもチャレンジしようと思う」88.2%、「友だちが助けてくれる」92.8%となり、1学期の調査よりも増加し8割を大きく超えた。これは、指導者と児童の関わり言葉や児童間の関わり言葉を【徳】の集団づくり研修で学び、継続して実践したからだろう。学級風土が心理的安全性を確立し、学びへ向かう姿勢へとつながったと考えている。この安心が、苦手なことへ立ち向かうレジリエンスや周りの友だちのサポートを生み出した。教職員アンケートからも「学級が仲良くなった」「トラブルを自ら解決できている」と学級力の向上を実感していることが分かる。保護者アンケートの学級や学びへの満足度は9割以上であり、子どもや教職員の実感と相関がある。これは、学校の取り組みを多くの場で発信したり、がんばる先生の取り組みにも可能な限り参加を促しているためだと考える。</p> <p>【見込まれる成果3】</p> <p><input type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>教員の学ぶ場を知徳体バランスよく保障することで、学習指導力と学級経営力が向上する。このことは、児童の満足度や学級での居心地の良さにつながる。また、公開授業研究会で実際に授業を見た参加者が満足し、取組内容を実践することで本研究が広まっていくこととなる。</p> <p>《検証方法》</p> <p>教員アンケートから「授業づくり」「学級経営」に関する項目の肯定的割合が8割以上となる。児童アンケートの「学校満足度」「学級満足度」「集団の結びつき」の項目の肯定的割合が8割以上となる。公開授業研究会に参加した教員アンケートの満足度が8割を超える。本校の取り組みを実践する割合を8割以上となる。</p> <p>〔検証結果と考察〕</p> <p>公開授業の教員アンケート肯定的割合は100%であり「学級の雰囲気がいい」「学び合うときの表情がいい」と学級へのコメントが多かった。それは、子どもたちと話し合い、一人ひとりの安心安全を大切にする学級安心ルールを全学級で実践してきた結果だと考える。児童アンケートの学級満足度は85%となり1学期より増加している。また、「問いを活用した学びは児童の学びが切れることがない」「対話のルーブリックの活用が効果的であった」「前時の振り返りが本時の学びに活用できている」と授業づくりの肝となる部分へ共感を得た。この学びを見た教員からは、授業の中で活用していた対話のルーブリック、振り返りの観点の掲示を自校でも実践したいとほとんどのアンケートに記載されていた。実際の児童の学びの姿を見た教員がよさに気づいたからだと考えている。これらのアンケートから本校の研究の広がりを実感した。</p>
---	-------	---

6	成果・課題	<p>【見込まれる成果4】</p> <p><input type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>本校は大規模校であるため、教員数や経験年数もさまざまである。その中で、校内研究として大学教員からの理論研修、先進的研究校からの教材分析研修、実技研修、集団づくり研修を共有することで、授業観、指導観、児童観をアップデートし、学校で共通理解できる。このことは、学校力向上に大きな役割を果たす。教員のめざす授業イメージが共有化でき、教員が満足して授業づくりに打ち込むことができる。</p> <p>《検証方法》</p> <p>教員アンケートを実施し、「授業づくりの悩みが改善した」「研究の内容が実践につながった」の肯定的割合が8割を超える。学校満足アンケートを実施し、満足度が8割を超える。その理由をインタビュー調査することで、肯定的割合の要因を分析する。</p> <p>〔検証結果と考察〕</p> <p>研究発表の参加者アンケートの結果は100%の満足であった。知:国語、徳:集団づくり、体:体育の取り組みをビデオや写真を入れ具体的に発表したところ「内容がよくわかり明日から取り組みそう」「知徳体に取り組み、全人教育を子どもの未来を考えて取り組んでいて素晴らしい」との感想があった。児童が「問い-対話-振り返りのサイクル」を回すことで主体的に学習できたことに加え、指導者もポートフォリオを活用し「問い-対話-振り返りのサイクル」を回すことで主体的に研究に参加できたことに対して反響を得た。多くの先生方から「問い-対話-振り返りのサイクル」を回すことやポートフォリオの活用、児童と指導者双方にアプローチする研究を自校でも取り入れたいと共感をいただいた。これは、本校の研究へ一定の評価をいただいた結果だと考えている。</p>
		<p>【研究全体を通じた成果と課題】 研究発表会等で使用した資料や研究冊子から引用し、端的に記述してください。</p> <p>1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>成果○児童に知徳体をバランスよく育成するために、年間を通してバランスよく研究を進められたことが教職員の指導力向上・仲間意識の向上、そして児童・保護者アンケート、調査結果から成果を確認できた。</p> <p>○知体の研究を通して、問い対話振り返りのサイクルによって、児童が自ら学ぶ姿へ変容を見せている。</p> <p>○徳の研究を通して、そのままの自分でいられる学校や学級づくりをする教職員の思いを共有できた。</p> <p>課題●研究テーマ達成に向け教職員個々の思いを融合し、自分ごとの研究となるよう進め方を工夫する。</p> <p>●学校大規模化の課題を本校の強みに変えるための取組みを教職員と検討し、児童に還元する。</p> <p>●研究で得た知見を広く還元する方法を検討し、教職員の取組、児童の姿を伝えていきたい。</p> <p>2. 継続研究（2年目） ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>成果○知徳体の3つの柱で取り組んだことで児童が安心して学ぶ環境が整い、学力向上へとつながった。「問い-対話-振り返りのサイクル」を回すことで、問いが学びの主体性を生み、単元の流れを子どもと創ることにつながった。対話は作成したルーブリックを活用したことで目標が明確になり、対話力の向上へとつながった。振り返りの観点を明確にして記述しやすくし、次の学びへとつなげる手立てとなった。教職員へのポートフォリオの活用は常に問いをもち、自分ごととする研究となり効果的であった。以上のことより、児童・教職員・保護者が共に変化を実感できる研究となった。</p> <p>課題●自分たちで学びを推進する力（個別最適な学びと協働的な学び）を充実させたい。指導者が学びの評価、成果物の評価をどのようにするのか。また児童と共に評価をつくることができないのかを研究したい。</p> <p>3. 継続研究（3年目）</p> <p>《代表校園長の総評》</p> <p>1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>学校力向上には、教員同士での共通の経験が不可欠である。同じものを見て感じ考える場を設定するための研修や研究の場を充実させることに全力を注いだ。共通の時間を過ごし価値観を共有し、子どもの見え方や授業観、子ども観、指導観を交流することで教員同士の学びやつながりが向上した。また、講師先生には本校の現在位置や方向性を指し示していただき、次への原動力をいただいた。教員の豊かな学びは児童の学びや学習環境に反映され、本校の力となり、公開授業を通して他校へと還元されたと考えている。この学びを来年度へつなげていきたい。</p> <p>2. 継続研究（2年目） ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>研究発表では300名を超える先生方に、本校の組織的研究・チーム力・研究内容の深まりに共感をいただいた。キーワードは自分事である。児童を自分事となる学びへ誘うための手立てを探り、教職員自身も自分事となる研究へ向かうための手立てを探ってきた。自分事となるためには、真摯に自らと向き合う必要がある。そのために必要なことを考え取り組んだ研究内容が賛同を得たと考えている。学校力の向上は一日にしてならず。だが研究を重ねることで教職員の意識、児童の意識、保護者の意識は変わりつつある。今後も継続して取り組んでいきたい。</p> <p>3. 継続研究（3年目）</p>